

# 「緑のリスト・環境保護」内の路線対立： 抗議政党から世界観政党へ

Kampf der Linien in der „Grüne Liste Umweltschutz (GLU)“:  
Von der Protestpartei zur Weltanschauungspartei

中 田 潤

## Abstract

Dieser Aufsatz versucht, die interne Situation der GLU in Niedersachsen und Hessen vom Frühjahr bis zum Frühsommer 1978 zu rekonstruieren. Am bemerkenswertesten in dieser Zeit war der große Zustrom linksalternativer Kräfte in die Partei. Das führte zu zwei Veränderungen in der grünen Bewegung. Die erste davon war die Entstehung einer Gruppe aus dem Teil der bürgerlich-ökologischen Kräfte als der bisherigen Hauptträger der Bewegung, welche die Zusammenarbeit mit linksalternativen Kräften aktiv zu fördern, um die Basis der Bewegung zu erweitern. Die zweite Änderung war, dass als Reaktion darauf eine Strömung entstanden war, die darauf abzielte, die Konfrontation mit den linksalternativen Kräften zu verstärken oder eine neue Partei zu gründen, die sich auf das Thema „Ökologie“ konzentriert. Letztere gründeten die GAZ unter Führung von Herbert Gruhl.

## はじめに

1977年5月にニーダーザクセン州における地方政党として結成された「緑のリスト・環境保護 (GLU)」は、翌年6月の州議会選挙に向けて着実に党勢を拡大していた<sup>1</sup>。しかしながら1978年初夏以降、党の性格は徐々に変化を遂げ始める。その本質に着目すると、その変化とは結党期の連邦政党「緑の党」が経験したものと同質のものであり、さらにそれを時間的に先取りしたものであることがわかる。そこで本稿では1978年前半から初夏にかけてのGLUの党内情勢の検証を行う。

それは緑の運動をめぐる闘わされていた多種多様な協同主義的な社会秩序理念のせめぎ合いを描き出す準備作業となるはずである。

1978年後半から徐々にGLU内部で生じてきた変化は端的に言えば、以下の3点にまとめることができた。その第一は、GLUの主張の核心にあった「環境保護」ないし「エコロジー」という概念そのものに対する党員の認識の変化、より厳密にいうならばその拡大が生じていた。しかしながらのその度合いは党員それぞれによって差があり、それは党が今後進むべき方向をめぐるイデオロギー論争として顕在化していくことになる<sup>2</sup>。

- 
- 1 「緑のリスト環境保護」については中田潤「緑のリスト・環境保護の成立 市民運動からエコロジー政党へ」『社会科学論集 (茨城大学人文社会科学部紀要)』6号 (2020年2月) 33-53頁を参照。
  - 2 Brugger, Alfred: „Es grünt so grün“, in: Sarstedter Kurier vom 16.6.1978. 彼はこの記事の中で、GLUが統一的政治構想を持っていないこと、そしてこの多様な集団はいずれ自らの立場を明確にする必要に迫られることを予言していた。

第二点目は、上記の第一点と密接に関連した事態の展開である。上記の「エコロジー」概念の拡大は、それを一つの社会秩序理念にまで高めることになった。その結果として、これまで連邦共和国のハイポリティクスが等閑視してきた様々な社会問題の解決を目指す、主として新左翼勢力によってなされてきた議論と親和性を帯びる、ないしは少なくとも新左翼勢力の視点からは親和性を帯びているように見えていた。1967/68年の学生運動の退潮の後、一種の政治的アバシー状態にあった新左翼勢力は、こうした状況を自らの政治活動の再活性化のチャンスと見なした<sup>3</sup>。その結果、新左翼勢力および彼らの主張に共感する人々が1978年からGLUに入党し始めるようになる。こうした新左翼勢力の流入は、これまでのGLUの性格を変化させ始め、さらに上記のイデオロギー論争を先鋭化させていくことになる。他方、新左翼勢力の伸張に対して反発した価値保守主義者によって、「緑の行動・未来」<sup>4</sup>に代表されるような新たな政治勢力の結集の動きも見られるようになる。

第三点目も上記の二つの問題と密接に関連した形で展開する。州議会選挙に向けた党組織の堅実な発展、そして党内外の予想を越える州議会選挙での善戦は、GLUの活動を時限的なものと考えていた党執行部の認識を変化させた。また前述のような社会秩序理念に

まで高められたエコロジーは、その実現には、全社会領域を視野に入れた体系的な政策の立案が不可欠であった。その目的の実現には持続性を持った党組織の構築と長期的な展望を持った活動の継続が必要であると多くの党員が認識する。加えて新たに合流してきた新左翼系の党員の多くは、そもそも政党とは持続的に活動を行う組織であるという理解を持っていた。こうして党を持続的組織へと改編していくダイナミズムが強まっていくことになる。

## 1. ペニッグビュッテル党大会

こうした党の方向転換の兆候はペニッグビュッテル党大会ですで見え始めていた。それゆえに叙述はそこから始めていきたい。

ブレーメンの北約25Kmに位置する集落ペニッグビュッテル (Pennigbüttel) において1978年4月8日、GLU党大会が開催された<sup>5</sup>。党の結成以降、次々と誕生していた郡支部が初めて一同に会したこの党大会には、42の郡支部が参加した。党員数はこの時点で約800名と見積もられていたが、その中から選ばれた約100名の代議員がこの場に集まった<sup>6</sup>。

この党大会開催の最大の目的は、6月4日に実施されることになっていたニーダーザク

3 近年左派オルタナティブの側の自己変革の動きに注目する研究も現れてきている。川崎聡史「西ドイツにおける『68年運動』以降の『ポスト革命的理想主義』：キンダーラーデン運動とユーザーに着目して」(東京大学大学院総合文化研究科博士論文 未刊行)。

4 Grüne Aktion Zukunft. 以下GAZと略す。

5 この時期、ニーダーザクセン以外においてもGLUを結成する動きが起こっていた。ヘッセンがこの動きに先行していたが、これについては後述する。また混同を避けるためにニーダーザクセンのGLUを指す場合、必要に応じてニーダーザクセンGLUと表記する。

6 厳密に言うならば、審議する時間を割けなかった議題を討議するために翌週にも継続の党大会が開催されていた。Hallensleben, Anna Elisabeth: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei? Die Entwicklung der Grünen Liste Umweltschutz von ihrer Entstehung in Niedersachsen 1977 bis zur Gründung der Partei Die Grünen 1980, Göttingen 1984, S. 84.

セン州議会選挙の準備であった。それゆえに候補者リストと選挙綱領 (Wahlplattform) の策定がこの党大会における主要な議題となっていた。候補者リストの策定は順調に進み、1位にモムバウアー (Mombaur, Martin)、2位にベダーマン (Beddermann, Carl)、3位にシュターデ支部からトーマス (Thomas, Grete)、そして5位にリューベン (Lübber, Richard) が選出された。モムバウアーは環境保護市民運動全国連盟 (BBU) の幹部会のメンバーであり、ゴアレーベンでの原子力関連施設誘致反対運動の活動家として知名度の高かった人物であった<sup>7</sup>。ベダーマンは党代表であると同時に原子力関連施設誘致反対運動の活動家でもあった。また農民であったリューベンも反原発市民組織の活動家であった。ここから GLU は自らを市民運動、とりわけ原子力関連施設誘致反対運動の延長線上に立つ存在と位置づけている一方で、候補者が多様な職種の人になるよう配慮していたことも読みとれる<sup>8</sup>。

選挙綱領については、その後の緑の党の歴史を特色づける党内論争の片鱗がすでに見え始める。GLU の党綱領は、事実上ベダーマン一人の筆によるものであり、それまで党内の公的な場において検討されたことはなかった<sup>9</sup>。その意味で今回の党大会で議論・採択された選挙綱領は、GLU 党員一般から正当性を勝ち得た最初の文書となった。

結論的に言えば、この綱領の圧倒的な部分がエコロジー問題、そして経済成長至上主義

批判に割かれており、この点だけに注目するならば、党員の多数がベダーマンによる価値保守主義的な理念に基づく党の方向性に同意していたと言えた。しかしながら今回加筆された部分を詳しく検討すると、この間に党が経験したいくつかの変化の痕跡を見てとることができた。その第一は、地方政党からの脱却志向である。この新たな綱領において、活動地域をニーダーザクセン州に限定するという条項が削除されていた。このことは、この時期進行しつつあった他の連邦州での GLU 設立やその他の環境政党の動きを視野に入れ、GLU が全国政党への発展の可能性を意識していたことを示していた。

その第二は、党内での左派オルタナティブ勢力による影響力の拡大と、そこから必然的に生じてきた党の方向性をめぐる意見対立の発生であった<sup>10</sup>。逆説的であるが、党の自己定義として「〔ボン〕基本法の枠内において活動する」<sup>11</sup> という一文が党綱領の最初に新たに挿入された事実がそのことを示していた。ベダーマンをはじめとした価値保守主義者にとって、このことは改めて綱領に書き込む必要性を感じないほど自明の前提であった。しかしながら左派オルタナティブ勢力の流入によって、この前提は自明ではなくなる可能性が生じていた。価値保守主義者たちは、それに対する懸念から敢えてこの一文を挿入した。さらに「軍拡競争への懸念」そして「有期雇用の拡大とそれによって生み出される構造的な失業の増大への懸念」<sup>12</sup> といった新左

7 ゴアレーベンでの原子力関連施設誘致反対運動については、中田潤「新しい社会運動としての環境保護市民運動 ニーダーザクセン州における原子力関連施設建設反対運動を事例に」『社会科学論集 (茨城大学人文社会科学部紀要)』4号 (2019年2月) 67-88頁を参照。

8 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 85.

9 より厳密に言うならば、この綱領はそれまでベダーマンと共同歩調をとってきたリッターフェードで弁護士業を営むブリングマン (Bringmann) および政治学者であったドムブロウスキ (Dombrowski, Wolfgang) の意見を取り入れつつ、市民運動組織の仲間と行った議論の成果であった。Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 78.

翼的なミリューにおいて関心が高かった問題群が新たに綱領に書き込まれた。この事実は彼らの影響力の増大を示していた。

また以下の幕間劇も左派オルタナティブ勢力の影響力の増大を物語るものであろう。ノンフィクション作家であり当時ハンブルク・多色リストで活動していたシュトローム (Strohm, Holger) がこの大会に現れ、ベダーマン批判を展開した。シュトロームの主張の骨子は、現在ハンブルクにおいても GLU が設立され活動しているが、この政党は「右翼的傾向」を示している。ベダーマンはこのハンブルク GLU 支援を通して、多色リストに対して敵対的な姿勢を示している、というものであった<sup>13</sup>。この闖入者による党首批判に対して、大会の雰囲気はベダーマン擁護で一致していた訳ではなかった<sup>14</sup>。これも左派オルタナティブ勢力ないしはその同調者がかなりの程度 GLU に流入していたことを示すものであった。そもそもシュトロームが党大会の場で発言を許されたということ自体、価値保守主義者内部においても運動の裾野を広げ

るために彼らの取り込みが必要であるという考えが、一定程度支持を獲得していた事実を示していた。

この間に党が経験した注目すべき変化の第三点目は、「エコロジー」という概念の運動への組み込みであった。採択された選挙綱領に以下のような一節がある。

我々を脅かす問題は、エコロジー的に志向された社会の枠組みにおいてのみ解決され得る。個別の危機現象に対して相互に関連のない個別の対策で対応するという考えは間違いである。[...] なぜなら危機は包括的なものであるからである。[...] 新しい生活習慣は経済と公共生活の新たな志向へと向かっていくものであり、目下の出口のない経済成長至上主義から遠ざかっていくものである<sup>15</sup>。

こうした表現が明確に示すように、それまで運動の中で原子力、大気汚染、水質汚染といったそれぞれ別個のものとして認識されて

10 論考を進める上で「左派オルタナティブ勢力」という用語を使用するが、彼（女）らの中に共通の政治的目標や共通の組織が存在していた訳では無かったことを強調しておきたい。彼らは具体的には女性解放、性的少数派の解放、住宅問題解決、居住・生産の次元でのコミュニティ形成、オルタナティブないし持続可能な生活スタイルの実現、南北問題解決、国際的平和運動といった多種多様な領域において、主として市民運動組織を結成して運動を展開していた人々の総称に過ぎない。その中にはシュポンティに代表されるような非教条主義的左翼組織や K グループと呼ばれる教条主義左翼組織も含まれていた。彼らは自らが関心を持つ社会問題に対してボン体制が関心を示さないことを批判する限りにおいて「反体制的」なのであり、またその社会問題解決に「権威主義的手法」を採用することを嫌うがゆえに「左派的」なのであった。これらの諸グループは相互に人的な交流もしくは同一の人物が複数の組織に属していることによって緩やかなネットワークを形成していた。

11 Programm der Grünen Liste Umweltschutz (GLU) von 1978, S. 1.

12 Programm der Grünen Liste Umweltschutz (GLU) von 1978, S. 2.

13 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 85.

14 大会に参加した代議員の一人は、一定数の参加者がシュトロームに同調していたことを回顧していた。Spät, Jürgen: „Aussteigen oder abwarten“, in: Grüne Information (Die Grünen Niedersachsen) Nr. 7/1980 vom 30.3.1980, in: Gorleben-Archiv, Martin Mombauer.

15 Programm der Grünen Liste Umweltschutz von 1978, S. 3.

いた環境に関する諸問題が、ここではエコロジーという概念が提起されることによって、相互に関連した一つの包括的な問題であると理解されていた<sup>16</sup>。そしてその解決には、新たな社会秩序の実現が必要であるという認識が明確に打ち出されていた。この新たな社会秩序理念と新左翼勢力が信奉する「社会主義」との関係は微妙なものであった。新左翼勢力は、後の党内対立で明確になっていくように、この新たな社会秩序概念の中に社会主義という体制変革への志向を読み取ろうとしたのに対して、この時点で多数派であった価値保守主義者は現状の政治システム内での改革が可能であると考えていた。そのことは選挙綱領の以下の部分から読み取ることができた。

それが金銭的な尺度によってのみ測定され、空気、水、健康や人間性の発展といったこれまで評価されなかった要素を軽んじる従来の成長概念に由来する試みである限り、さらなる経済成長を通して問題を解決しようとする全ての試みを我々は拒絶する。[...] 我々の社会が長期的に生き延びるためには、社会活動の重点移動が早急に必要である。貴重な人間の労働を浪費 [= 廃棄するための生産：筆者] せず、それを均衡のとれたエコ体系の再生と維持のために投入しなくてはならない。[...] こうした活動に必要な財源は、資源とエネルギーの節約、ならびに生産物の使用期間を長くすることによって調達することは可能である。我々がここで

肯定的にとらえる意味での成長を達成するために、財政的なインセンティブによってそれに相応しい発展の重点が形成されなくてはならない<sup>17</sup>。[下線部筆者]

エコロジー的な経済システムへの転換は、現状の経済システムの枠内において「財政的なインセンティブ」を通して達成されるという認識がここでは明確に示されていた。これは後に緑の党内のレアロと呼ばれるグループの主張を先取りするものであった。

ペニッグビュッテルでの党大会はその後の党内対立の萌芽を垣間見せながらも、州議会選挙を直前に控えていたという事情により、全体の雰囲気は挙党一致体制を前面に押し出したものであった。大会参加者の印象もメディアの反響も同様であった<sup>18</sup>。

## 2. 党内路線対立の始まり 左派オルタナティブとの関係をめぐって

前述のように左派オルタナティブ勢力のGLUへの流入傾向はすでに1978年前半から見られていた。州議会選挙においてGLUが議席獲得こそならなかったものの、好成績を収めたことによってこの傾向はさらに強まった。そうした人々には社会主義的な信条から連邦共和国の政治システム全般を否定する勢力から、理想主義的な前任者のプラントとは異なり現状のマネジメント重視のシュミット政権に失望して次第にSPDから離反して

16 „Nicht schwarz ärgern - grün wählen“, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 10.4.1978, S. 4 (以下FAZと略す). この記事の中でGLUがシングルイシュー政党から世界観政党へと主張を変化させてきていることが指摘されている。

17 Programm der Grünen Liste Umweltschutz von 1978, S. 3.

18 „Wahlkampfauftakt der Grünen“, in: FAZ vom 4.4.1978, S. 2; „Nicht schwarz ärgern - grün wählen“, in: FAZ vom 10.4.1978, S. 4; Die Welt vom 10.4.1978; Die Nordseezeitung vom 10.4.1978; Die Zeitung der Lüneburger Heide vom 10.4.1978; Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 84.

いった層までが含まれていたのであるが、彼らは GLU に対して期待を寄せ始め、一部はこれに積極的に参画していくようになる。またいわゆる教条主義的新左翼と呼ばれる勢力は、組織的に GLU に接近し始めていた。その程度は郡支部毎に異なるものであったが、GLU 党員の政治的構成はこうして次第に変化していくことになる。また左派オルタナティブ勢力の存在は、それまで価値保守主義者が主導してきた党内での議論を、彼らとの共闘を通して緑の運動をより拡大していくチャンスと見なし、その流入を肯定的に理解する勢力を党内に生み出していくことになった。

これまで党を指導してきたベダーマンは思想的には価値保守主義者であった。彼は左派にシンパシーを持つ人々が GLU の活動に流入することを好ましく思っておらず、左派勢力との協力にも否定的であった。他方で教条主義的新左翼組織、とりわけ共産主義同盟 (Kommunistischer Bund: KB) は州議会選挙に際して GLU を支援するように呼びかけていた。その意図について彼らの内部文書は以下のように述べていた。

共産主義者にとって必要なのは、ブルジョワ政党の解体の過程に積極的に介入することである。[その目的のために：筆者]「緑」ないし「多色」リストという新しい政党のコンセプトが語られているあらゆる空間に共産主義者は居合わせ、発言しなければならない<sup>19</sup>。

ブルジョワ議会とその他全ての反動的な機関を追い払うに充分なほど君たちが力を持っていないとき、そうした「組織の

中で」活動することが君たちの義務である。[…] 敵の間に存在する小さな不和、異なる国のブルジョワジー間の利害の相違、自国のブルジョワジー内部の階層ないしグループ間の利害の相違を、最も適切な瞬間に注意深くあらゆる可能性をもって巧妙に利用し尽くした時、そしてまた自らが敵に適応することによって我々は強大な敵を打ち負かすことが出来る。こうした戦略は大衆の中に同盟相手を獲得することを目的としている。この同盟は一時的なものであり不安定で信頼の置けないものであるとしてでもある。これを理解しないものは、マルクス主義そして科学的な現代の社会主義を全く理解していない<sup>20</sup>。

この共産主義同盟によるいわゆる「潜入戦術 (Entrismus)」に関する文書を度々目にしてきたベダーマンは、左派勢力に対する拒否感を一層強めていた<sup>21</sup>。

彼のこうした左派に対する強硬姿勢に対して、すでに州議会選挙戦中から異を唱える声が党内から出されていたが、選挙に与える否定的な影響への配慮から、それは表面化しなかった<sup>22</sup>。しかし選挙が終了した直後から彼の党の運営姿勢に対する批判が噴き出してくる。その契機となったのはヘッセンでの環境政党設立をめぐる動きであった。そこでしばらくニーダーザクセンからヘッセンに視点を移す。

## 2-1. ヘッセンにおける緑の運動

ドイツ中部に位置し、北部でニーダーザクセン州と接するヘッセン州でも 1977 年以

19 „Grüne Listen. Aktiv eingreifen“, in: Der Spiegel 28/1978, S. 55-57.

20 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 92.

21 ハンブルクの多色リスト内でのこうした KB の活動について、ベダーマンはシュトロームの報告等により情報を得ていた。Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 92ff. und 143.

22 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 143.

降環境政党設立の動きが起こっていた。そうした例として10月のシュポンティ<sup>23</sup>による「緑のリスト選挙連合 (Wahlplattform der Grünen Liste)」結成の呼びかけや<sup>24</sup>、1978年2月16日の「オッフェンバッハ反原発市民運動 (Bürgerinitiative Offenbach gegen Atomkraftwerke)」という組織による「声明」、そして同時期の「ダルムシュタット提案 (Darmstädter Vorschlag)」などを挙げることができた。この時点で環境政党の結成を呼びかけたこれらの組織の性格の詳細は明らかではない。しかしながらオッフェンバッハ反原発市民運動について言えば、声明の宛先を「ヘッセン州内における左派勢力」としており、またその主張の言い回しのスタイルから社会主義的な政治スペクトルに属していたと推測できた。またダルムシュタット提案について言えば、選挙リスト作成の意図は、市民運動の活動を議会において補完することであると明確に述べられており、その意味でこのリストの作成者は市民運動に軸足を置く勢力である

と推測できた<sup>25</sup>。

これらの動きを糾合する試みとして3月11日にオッフェンバッハにおいて、環境保護・反原発運動の領域から約20の市民運動組織、総勢約100名の参加により選挙リストの作成について議論する場が設定された。またこの会合にはAUD<sup>26</sup>、BUND<sup>27</sup>そしてKBも参加していた。同年10月8日に実施される予定であったヘッセン州議会選挙への候補者擁立を目標としたこの会合の最も大きな争点は、選挙リストの性格であった。より具体的には、環境保護活動が結集の最大公約数となるのか、それとも女性解放、住宅問題の解決、雇用環境の改善といったより広範な社会問題の解決に取り組む勢力もそこに加えるのか、つまりリストを「緑」なものとするのか、「左派オルタナティブ」なものとするのかという点であった。この会議では結局合意に至ることができず、リストの作成の試みはとりあえず失敗に終わる<sup>28</sup>。

この動きとは独立して、その一ヶ月後の4

---

23 シュポンティ (Spont) とは1968年運動および議会外反対派から成立してきた新左翼系集団の一つ。革命における前衛集団の意義を重要視する教条主義的新左翼を批判し、むしろ大衆の自発性を重要視することからこの名称を持つ。彼らはミュンスター、西ベルリン、コンスタンツそしてとりわけフランクフルトなどの大学都市において影響力を持っていた。以下の研究を参照。Kasper, Sebastian: Das Ende der Utopien. Der Wandel der Spontis in den langen 1970er-Jahren (Diss. an der Universität Freiburg), 2017.

24 Felder, Zoë: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen: Entstehung und Entwicklung bis zur Landtagswahl 2009, Wiesbaden 2014, S. 44.

25 Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 45.

26 AUDについては中田潤「緑のリスト・環境保護の成立 市民運動からエコロジー政党へ」41頁を参照。Stöß, Richard: Vom Nationalismus zum Umweltschutz. Die Deutsche Gemeinschaft/ Aktionsgemeinschaft Unabhängiger Deutscher im Parteiensystem der Bundesrepublik, Opladen 1980.

27 ドイツ環境・自然保護連盟 (Bund für Umwelt und Naturschutz Deutschland: 略称 BUND)。1975年7月20日に医師ボードー・マンシュタイン (Manstein, Bodo)、科学雑誌編集者ホルスト・シュテルン (Stern, Horst) 等によって設立された環境保護団体。2019年時点での会員数は47万人でドイツ最大の環境保護団体の一つである。1975年から1977年までグルールが総裁を務めていた。Bund für Umwelt und Naturschutz Deutschland e. V. (Hg.): 40 Jahre BUND. Die Geschichte des Bund für Umwelt und Naturschutz Deutschland e. V. 1975-2015, Berlin 2015.

28 Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 46.

月14日に「ヘッセン緑のリスト・環境保護 (Grüne Liste Umweltschutz Hessen)」(以下ヘッセン GLU と略す) という名称の環境政党の設立が発表される。設立者は当時教員であり、AUD に所属した経験もあるファウスト (Faust, Bernd) であった。彼は当初ヘッセン州北部を中心に活動する環境保護市民組織を糾合する形で環境政党の設立を構想していたが、教条主義的新左翼組織との関係が明確でないことを理由に、市民運動組織の側から拒否反応を示されていた。そこで方針を転換し、すでにバダーマンがニーダーザクセン州において地歩を固めていた GLU に支援を求め、GLU のヘッセン州における姉妹政党という位置づけで自らの活動を開始した<sup>29</sup>。このヘッセン GLU は生活環境保護国際連盟 (Weltbund zum Schutz des Lebens: WSL) とも協力関係にあり、創設時においては価値保守主義的傾向を持つ党員が多数を占めていた。しかし結党直後から、かつて社会民主党青年部ヘッセン州支部に属していたトゥルス (Truss, Wolfgang) や後にヘッセンにおける緑の党の中心的人物の一人となるクーネルト (Kuhnert, Jan) といった左派的志向を持った人物の入党が相次ぎ、党は1978年を通して左派オルタナティブな色彩を強めていった<sup>30</sup>。

しかしながらニーダーザクセン州とは異なり、ヘッセン州では GLU が緑の運動において主導的な役割を演じた訳ではなかった。ニーダーザクセン、ハンブルクの州議会選挙で環境保護ないし多色陣営が好成績を取めたことを

受けて、一時は下火になったヘッセンにおける環境保護・左派オルタナティブ勢力の糾合を目指す動きが再活性化し始める。6月11日にフランクフルトにおいてヘッセン GLU, AUD そして様々な市民運動組織の参加の下で会合が持たれた。緑の党で後に重要な役割を果たすことになるケルシュゲンス (Kerschgens, Karl) が、AUD およびダルムシュタット市民運動 (Darmstädter Bürgerinitiative) の代表を兼任していたことにより、議論を進めるにあたって主導的な役割を果たした。また同様に緑の党の創設メンバーの一人であるホラチェク (Horacek, Milan) もこの会合の提唱者となっており、彼はエコロジー志向を可能な限り取込んだ「左派オルタナティブ」として選挙連合を編成することを望んでいた。議論の結果、この会合に代表を送った12の団体うち、ヘッセン GLU を含む11団体が選挙連合の発足に同意した。その名称は「緑のリスト・環境保護と民主主義のため選挙連合 (Grüne Liste - Wählerinitiative für Umweltschutz und Demokratie: GLW)」であった。GLW は全国初の左派オルタナティブ系と市民・エコロジー系の組織による共同歩調が実現した例となった<sup>31</sup>。

しかしながらこの左派オルタナティブ勢力と市民・エコロジー勢力の提携には早くも暗雲が立ち込める。GLW が結成された6月11日にハノーヴァーにおいてニーダーザクセン GLU の執行部会義が開催されていた。そこでニーダーザクセン GLU 執行部は、姉妹政党であるヘッセン GLU が、GLU の名称を掲げ

29 „Die Grünen Grabenkampf“, in: Handelsblatt vom 15./16.7.1978; „Grüne Liste Umweltschutz“, in: FAZ vom 15.4.1978, S. 50. またヘッセン GLU はその名称のみならず党則もニーダーザクセン GLU のそれをほぼ踏襲していた。

30 ヘッセン GLU はすでにこの時期の選挙プログラムにおいてエコファンドの設置、党官職と議員の分離、ローテーション制度等を提起していた。Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 47.

31 „Vogelschützer und Spaßvögel“, in: Der Spiegel 31/1978, S. 29f.; Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 48f. ハレンスレーベン は GLW を一つの政党と誤認している。Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 136.



てヘッセン州議会選挙に参加することが望ましいという決議を行っていた。これはヘッセン GLU がこの決議に従った場合、GLW とヘッセン GLU という 2 つの緑の運動がヘッセン州議会選挙において競合することを意味していた。6 月 11 日になされた 2 つの決定、つまりヘッセン GLU の GLW への合流とニーダーザクセン GLU によるヘッセン GLU 単独での選挙戦参加への「指示」は、より本質的な観点から見れば緑の運動の内部に存在していた 2 つの路線の違いを示すものであった。

## 2-2. ヘッセン委員会の活動

まずヘッセン GLU の党内状況について見ていく。ヘッセン GLU の GLW への合流は、党としての決定であった。しかしながらヘッセン GLU の代表であったファウストは、自らの政治信条からこれに同意していなかった。彼は合流決定直後から GLW を批判する発言を繰り返し、ヘッセン GLU と GLW の提携はすでに解消しているような印象を外部に対して与えていた。ファウストが GLW と袂を分かち必要があると考えた理由は、GLW 内に

教条主義的新左翼組織のメンバーが存在していること、そして GLW がボン体制そのものの変革を主張していることにあった。「右派や左派から距離をとること、そして K グループや NPD に近い組織に反対することは不可欠である。非民主的な勢力との共闘は問題外である」<sup>32</sup> という彼の立場は、概ねベダーマンと一致するものであった。

他方ニーダーザクセン GLU も、ヘッセン GLU を一方的に支持するという執行部方針が、党内において一致して支持されていたわけでは無かったことが明らかになってくる。先の執行部会議の数日後、エーバーホルツェンにあるオット (Otto, Georg) の自宅において執行部会が開かれ、ヘッセン委員会 (Hessen Kommission) を設置することが決定された<sup>33</sup>。このヘッセン委員会の任務は、ヘッセン GLU と GLW を調停することであった。そのメンバーはモムパウアー、リップルト (Lippert, Helmut)<sup>34</sup>、ドムブロウスキ、ベルトラム (Bertram, Rolf)、シェットラー (Schöttler, Gisela)、シル (Schirr, Werner) の 6 名であった<sup>35</sup>。

32 „Grüne Listen. Aktiv eingreifen“, in: Der Spiegel 28/1978(10.7.1978), S. 55-57.

33 この執行部会の開催日は不明である。またこの会合にベダーマンが参加していたのかも不明であるが、その議論の内容から判断すると参加していなかった可能性が高い。またハレンスレーベン は 7 月 26 日と主張しているが、これは明らかに間違いである。なぜなら交渉決裂が 6 月 24 日であり、それまでに 3 回の交渉が両者の間で行われた記録が残っている。こうした状況から、この執行部会は 6 月 11 日以降の数日以内に開催されたと考えるのが妥当であろう。Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 137.

34 ニーダーザクセン州における緑の党の活動において長らく中心的な役割を果たすことになるリップルトが GLU に入党したのは、比較的後になってからであった。1977 年まで SPD の党籍を有していたが、1978 年 3 月に GLU に入党し急速に頭角を現していた。そこには 1978 年後半からベダーマンとリップルトを含むその批判者が、党員や支部に向けて直接「怪文書」送付し合う状況の存在が一定の役割を果たしていた。この状況を憂慮したリップルトは、それまで事実上機能していなかった党内機関誌『ルンドブリーフ (Rundbrief)』を定期的 (隔週) に発行する体制を整えた。結果的に情報流通のハブに位置することになったリップルトは、その後急速に党内での影響力を強めていく。Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 154, 160 und A76.

35 この 6 名のメンバーの職業は、いずれも研究者ないし教員であった。

さらに同じ頃、11のニーダーザクセン GLU 郡支部の代表がハノーヴァーで会合を開いていた。彼らはヘッセンで実現している「非教条主義的新左翼」との共闘は、ニーダーザクセンにおいても党勢の拡大のために望ましいものであり、他方でこうした方針に反対するベダーマンの存在はその障害となっているという点で一致していた<sup>36</sup>。こうした批判勢力の動きについてベダーマン自身も気づいていたようであり、後述する GAZ のグループとの会談に際して、来る党大会において自らが党首に再選されない可能性について言及していた<sup>37</sup>。

ともかくニーダーザクセン GLU のヘッセン委員会は、ヘッセン GLU と左派オルタナティブ勢力が優位を占める GLW との共闘の可能性を探るためにヘッセンに介入していく。6月に3回の協議の場が設定されたが、状況はヘッセン委員会の望む方向には進まなかった。GLW の側は、ヘッセン GLU 内の「非民主主義的」勢力との協力が難色を示し、その党内からの排除を交渉の前提条件としていた<sup>38</sup>。

他方、価値保守主義者が優位を占めるヘッセン GLU の執行部も左派勢力との提携に消極的であった<sup>39</sup>。6月24日にゲッティンゲンで行われた3回目の交渉にはベダーマンも同席したが、双方の主張は平行線をたどり結局交渉は決裂した。その後7月1日に GLW の

側は、ヘッセン GLU 抜きで今後の活動を進めていくことを宣言する。この時点での GLW の党員数は約 400 名、執行部のメンバーには、後に緑の党で活躍するマッテース (Matthaes, Jens)、エンゲル (Engel, Jürgen) などがおり、州議会選挙に向けて 36 の選挙区で候補者を擁立する予定であった<sup>40</sup>。

### 2-3. ベダーマン批判の開始

交渉決裂から数日後、ヘッセン委員会は全郡支部に向けてヘッセンでの交渉経過について報告書を発表する。この報告書はベダーマンを激しく批判する内容のものであった。報告書作成に中心的な役割を果たしたミュラー＝ユング、バルトラム、リップルトなどのベダーマン批判派の主張は要約するならば以下のようなものであった。先のニーダーザクセン州議会選挙において教条主義的新左翼から「非公式」の支援があったにもかかわらず、GLU は票を減らさなかった<sup>41</sup>。それゆえに左派オルタナティブ勢力との協力は党の基盤を拡大する意味で有効である。しかしながら左派勢力と距離をとることを望むヘッセン GLU に対してベダーマンが一方的に肩入れしたことが交渉失敗の最大の原因である<sup>42</sup>。

この報告書の発表にあたって事前に議論ないし弁明の機会を与えられなかったベダーマンは、6月29日付けで報告書に対する反論を

36 Neue Hannoversche Presse vom 17.7.1978; Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 144f.

37 Gruhl, Herbert: Überleben ist alles, München 1987, S. 198.

38 Frankfurter Rundschau vom 24.6.1978 (以下 FR と略す); Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 137.

39 ヘッセン GLU の政治的な姿勢については以下を参照。„Zunächst war nur ein junger Lehrer da“, in: FR vom 27.6.1978.

40 Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 50. 彼女は GLW を都市型政党と特徴づけている。またヘッセンにおける緑の党の成立史およびその後の展開に関しては以下の文献を参照。Göpfert, Claus-Jürgen: Die Hoffnung war mal grün. Aufstieg einer Partei. Das Frankfurter Modell, Frankfurt a.M 2016.

41 GLU の選挙戦への参加はこれが初めてであり、この主張自体は実証不可能なロジックである。

42 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 137f.

全郡支部に向けて発信する。その内容は以下のようなものであった。ヘッセン GLU への支援、そして左派と距離をとる方針は、先の 6 月 11 日の執行部の決定であり、自らはその方針に従っただけである。また GLU に対する教条主義的新左翼の側からの一方的な支持表明は、GLU が彼らに対して譲歩する理由とはならない。むしろこれによって市民層の離反を招くことこそ憂慮すべきである。さらに 11 の郡支部が行った行動は自分に対する陰謀に他ならないとして、彼はこうした行動に対して強い不快感を表明していた<sup>43</sup>。こうしたやりとりは、時期的には GLU リーベナウ党大会の直前になされ、大会の雰囲気大きく影響していくことになった。

7 月に入ると両者の間での批判の応酬はさらにエスカレートしていく。一般党員の面前で繰り広げられるこうした事態の展開に憂慮した党執行部は、7 月 9 日に Lindwedel (Lindwedel) において事態の收拾のための執行部会を開催する。一般党員にも公開されたこの会議に対する関心は高く、当日の議事録には通常の 2 倍近い 21 名の参加者の名前が記載されていた。主要な議題は当然のことながら前述の対立の調停であったが、それは党の基本理念を確認するという形式がとられた。結論として以下のような党の基本理念が確認された。

GLU は、政党政治を議論するに際して「右派」「左派」ないし「保守」「リベラル」「社会主義」といった既存の分類はもはや充分ではないと考える。それゆえに自らがこうした図式のどこかに位置づけられることを GLU は望まない。[...] 生態系の保護という国際的な問題を前に、ナショナルスティックな議論は排除される。ま

た共産主義イデオロギーは、この問題に立ち向かう必要のある人類の未来にとって何の助けにもならない。GLU は自らを、既存の経済システムに代わる未来のオルタナティブであると理解しており、その意味で進歩主義勢力であると見なしている<sup>44</sup>。

この決議には、緑の党がその後 1980 年代末まで抱え続ける構造的な問題とその「解決策」が先取りされていた。構造的な問題について言うならば、それは新左翼主義勢力、価値保守主義者、国民保守主義者などといった、既存の政治的観点からすれば左右の両翼に位置していた勢力が、エコロジーという旗のもとに一つの政治空間に流れ込んで来たとき、それをいかなる形で止揚しえるのかということであった。そしてその「解決策」とは、「右でも左でもなく前へ」のスローガンに典型的に示されるように、自らをそうしたカテゴリーに収まらない「進歩主義勢力」として定義し、またその点を強調することによって、思想的潮流の多様性が党の分解ないし内紛に至ることを防ぐというものであった。

「右でも左でもなく前へ」というスローガンは、経済成長至上主義原則や新自由主義的な社会秩序に対するある種のオルタナティブの可能性を内包していた。またこうした理念に真摯に向き合った結果、それまでの新左翼主義や国民保守主義といった既存の思考様式・ミリューから自己変革を遂げながら離脱していった党員もしくは支持者も少なからず存在していた<sup>45</sup>。

しかしながら社会秩序理念として潜在的な可能性を持っていたこの「第三の道」という概念は、この時点の政治空間、そしてその後の緑の党の歴史においては、その可能性が突

43 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, A70 (29.6.1978).

44 Protokoll der Vorstandssitzung von GLU am 9.7.1978 in Lindwedel: Hallensleben, A74.

き詰められるのではなく、むしろ寄り合い所帯である実態を対外的に隠蔽する、ないしは党内対立の先鋭化を避けるツールとしての機能を担わせられることの方が多かった。その後の党内政治のレベルで実際に展開していったのは、左右の勢力争いであった。ヘッセンの問題を契機として顕在化したニーダーザクセン GLU 内の対立は、党の方向性を巡って生じたものであり、より詳しく言うならば新左翼勢力と市民・エコロジー勢力との関係のあり方をめぐるものであった。対立の調停を目指した7月9日の執行部決議は、その後の展開をみたとき、それに成功したとは言えなかった。むしろその後、批判の矛先はベダーマンの個人の資質に向けられていく。

敵が我々の陣営の中にいる。それはベダーマンである。[...] 彼はハンプルクでへまをやらかし、[環境保護・左派オルタナティブ勢力が：筆者] 協調していたヘッセンを分裂させた。沈黙、干渉そして矛盾によってベダーマンは運動を崩壊させようとしている。ヘッセンを分裂させたベダーマンは、今や交代するべきである<sup>45</sup>。

C. ユルゲンス (Jürgens) なる人物によって7月前半に出されたベダーマンに対するこの唐突な辞任要求に対して、これまで彼と最も緊密な協力関係にあったドムブロウスキもこれに同調する。自らの党執行部職の辞任を宣言した7月16日付けの党執行部宛ての書簡

の中で彼は以下のように述べる。

ベダーマンは底辺民主主義的な党の変革の問題を巧妙に「右派と左派の対立」にすり替えることに成功した。しかし事態の本質は彼個人の問題に由来するのである。残念ながら目下の状況は私には容認できない<sup>46</sup>。

この書簡の中でドムブロウスキは「ベダーマン問題」がその本質において政治路線対立として展開していることを明白に認識しながら、あえて問題をベダーマンの人格の問題に矮小化しようとする。結局ベダーマンの排除は、批判勢力の中では既定路線であったようである。彼らにとって、党の拡大のために「非教条主義的新左翼」を取り込むことは歓迎すべきことであり、こうした方針に頑強に反対するベダーマンの存在は障害であった<sup>47</sup>。

### 3. 「緑の行動・未来」の結成

ニーダーザクセン GLU においてベダーマンの退陣を求める動きが進行していた時、ヘッセン GLU でも価値保守主義的立場を標榜するファウストの党指導に対して不満を持つ勢力が独自の行動を開始していた。彼らは前述の6月末に決裂した GLW との交渉を7月12日にファウスト抜きで再開していた<sup>48</sup>。

他方でファウストも別な形で事態を進展さ

45 ハレンスレーベンが党のこうした自己定義を「自己演出であり、両極を批判する「全体主義論」の一種のバリエーションであるという以上の意味を持たない」と評価している。筆者は GLU による議論が持つ協同主義的な性格を強調する立場から、こうした評価には同意できない。Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 138.

46 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 144.

47 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 144.

48 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 145.

49 Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 51.

せようとしていた。1978年6月のニーダーザクセン州議会選挙においてGLUが健闘したことによって、ベダーマンは新たに出現した政治潮流を象徴する人物として一定の知名度を獲得するに至っていた。しかしながら当時緑の運動において圧倒的な知名度を誇っていた人物はベダーマンではなく、ニーダーザクセン州選出の連邦議会議員（CDU）であり、また当時のベストセラー『略奪された地球』の著者であったヘルベルト・グルールであった<sup>50</sup>。その著書での主張から明確なように、彼は価値保守主義者であった<sup>51</sup>。

ニーダーザクセンGLUは彼の抜群の知名度を党勢の拡大に生かすべく、彼の居住地があるバーリングハウゼン（Baringhausen）郡支部を通じて、再三にわたって入党ならびに州議会選挙に立候補することを呼びかけていた。グルールは環境政党は連邦規模の政党であるべきという考えを持っていたが、1978年前半の時点でGLUが地域政党にとどまる意思を持っているように見えたこと、そして何よりCDUにおいて自らを支持する有権者に対する良心の呵責からこの時点ではGLUの側からの申し出を拒絶していた<sup>52</sup>。

しかしながら1978年後半に入ると、ベダー

マンとの接触<sup>53</sup>を通して、緑の運動が全体として伸長しつつあるものの、その内部において左派オルタナティブ勢力の影響力の増大が著しいこと、それゆえにベダーマンやファウストなどの価値保守勢力が党内において劣勢に陥っている事実を認識するに至る。また他方で彼のイニシアティブによって作成されたCDUの環境政策大綱「構想76」が当時幹事長であったビーデンコップや、党首コールに冷遇され続け、党内での環境政策の実現の可能性について失望感を強め続けていたという事情もあった<sup>54</sup>。グルールはこうした状況認識から、左派オルタナティブ勢力とは距離をとったスタンスにある全国レベルの環境政党のイニシアティブを自ら握る意向を固める。

1978年7月11日に遂に彼はCDUからの離党を宣言し、その2日後の7月13日に結党大会を開催し、新たな環境政党「緑の行動・未来」の創設を宣言する。ファウストもこのGAZの結成大会に参加しており、GAZへの入党を表明していた<sup>55</sup>。

### 3-1. ヘッセン GLU ポールハイム党大会

こうしてヘッセンGLU内部において、GLWへの接近を目指す勢力とGAZへの合流

50 彼については中田潤「新しい社会運動における価値保守主義 H.グルールとB.シュプリングマンを題材に(1)」『社会科学論集(茨城大学人文学部紀要)』59号(2015年2月)、35-56頁を参照。

51 生態系の保全を最重要視する視点から、人間生活水準の向上を目指す社会政策全般を環境に対する負荷として否定的に見なす傾向がグルールの議論には見られた。また彼の議論は自然環境の保全と人間の社会生活がもたらすそれへの負の影響との関係に集中しており、人間の社会生活における権力構造への関心は薄かった。その結果、彼は福祉国家のさらなる拡充および既存の権力構造の変革に対して否定的な立場を表明していた。左派ミリューを背景に持つ環境保護勢力にとってこの点は容認できなかった。Otto, Georg: „An die GLU Orts, Kreis und Landesverbände, an befreundete Gruppen, an den Vorstand der GAZ“ vom 3.9.1978, in: Gorleben-Archiv: Martin Mombauer; „Die Grünen - zwischen Bürgerinitiative und Partei“, in: FAZ vom 11.8.1978, S. 5.

52 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 140.

53 Gruhl: Überleben ist alles, S. 198.

54 中田潤「新しい社会運動における価値保守主義」44-45頁。

を目指すファウストラの勢力の動きがそれぞれ同時に進行することになった。まさにその最中の7月15日にヘッセン GLU の党大会がポールハイム (Pohlheim) で開催される。

ファウストはこの大会の席上、ヘッセン GLU の党支部をそのまま GAZ の党支部へ改編する提案を行うが否決される。さらにこうした提案が郡支部や一般党员に向けて事前の議論もなく行われたこと、そしてファウスト自身が GAZ との二重党籍状態にあることが非難され、彼は党則違反を理由に、党代表の座も追われることになった<sup>56</sup>。

その党大会の席上、GAZ を代表して参加していた同党の共同創設者でもあったカミンスキ (Kaminski, Heinz) は、GAZ の指導の下で緑の運動が団結して州議会選挙に臨むことを呼びかけるが、賛同を得られなかった。その後 GAZ はヘッセン GLU との合同の断念を宣言し、7月23日に独自のヘッセン州支部を設立する。支部長にヘース (Hees, Waldemar) が就任し、この時点での党员数は約120名、州議会選挙に向けて55の選挙区のうち40選挙区で候補者の擁立を終えていた<sup>57</sup>。

他方反ファウスト勢力は、同じ大会の席上で GLW との交渉が進行中であり、共同の選挙連合形成に大筋で合意していることを報告する。その承認を求める議案が提案され、GAZ への合流を否決した同じ議員の

賛成多数により今度は可決される。選挙連合の名称は「緑のリストヘッセン」(Grüne Liste Hessen: GLH) であった<sup>58</sup>。こうしてヘッセン GLU の多数派は左派オルタナティブが優位にある GLW への合流を選択する。

ヘッセン GLU 党员の多くがこうした選択を行った背景には、GAZ の党の運営方針ならびにその政治的方向性が大きく影響していた。GAZ は結成にあたって「緑のマニフェスト (Das Grüne Manifest)」と題された綱領を発表していた。その中で党员個人ならびに支部組織は、その政治的主張および組織構成について党中央の厳格な指示に従うことが謳われていた。こうしたトップダウンによる組織運営の原則、そしてグルールの権威主義的な発言のスタイルは、それまで主として市民運動組織の中で活動経験を積み、いわゆる「底辺民主主義」カルチャーに親しむようになっていた多くのヘッセン GLU 党员にとって嫌悪感・反発を引き起こすものであった<sup>59</sup>。実際こうした GAZ に対する懸念は、ポールハイムの党大会の場でも代議員たちから繰り返し表明されていた。

またグルールの著作から理論的に導き出された綱領の存在も、党勢の拡大にとってネガティブな影響を持つことになった。その内容の「あやふやさ」の欠如は多義的な解釈の可能性を排除し、実際には政治的志向が異なる

55 Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 51; Veen, Hans-Joachim; Hoffmann, Jürgen: Die Grünen zu Beginn der neunziger Jahre. Profil und Defizite einer fast etablierten Partei, Bonn 1992, S. 13; Hüllen, Rudolf van: Ideologie und Machtkampf bei den Grünen. Untersuchung zur programmatischen und innerorganisatorischen Entwicklung einer deutschen „Bewegungspartei“, Bonn 1990, S. 151.

56 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 142; Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 51.

57 „Angst vor der Spaltung ließ den Zank vergessen“, in: FR vom 17.7.1978; „Die Grüne Aktion Zukunft kandidiert in Hessen“, in: FAZ vom 31.7.1978, S. 1; Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 142; Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 52.

58 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 142.

59 „Die Grünen - zwischen Bürgerinitiative und Partei“, in: FAZ vom 11.8.1978, S. 5; Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 141.

多様な存在としての党大衆全般に向けた「求心力」を発揮することができなかった。GAZの影響力は価値保守主義的志向を持つ市民層の狭いグループにとどまることになった<sup>60</sup>。

#### 4. GLH とヘッセン州議会選挙

厳密に言うならば GLH は GLW とヘッセン GLU の選挙連合であり、両組織の独立性は維持され続けることになっていた。7月23日に135名の代議員の参加の下、アルスフェルド (Alsfeld) で初の大会が開催され<sup>61</sup>、ケルシュゲンス、トゥルス、マッテース、エルケ (Oelke, Dieter) ら計7名からなる執行部が組織された。

こうして GLH は左派オルタナティブ勢力が優位にありながらも一定程度市民・エコロジー勢力をも包括した組織としてヘッセンの州議会選挙戦に臨むかに見えたが、共同歩調は早くも怪しくなってくる。その原因は、コーン=ベンディット (Cohn-Bendit, Daniel) の存在であった<sup>62</sup>。フランスからの強制退去後フランクフルトを中心に活動していた彼を GLW は候補者リストの7番目に指名していた。立



〔シュプリングマン (左) とグルール (右)〕

候補に際して彼が提出した以下のような所信表明がヘッセン GLU を刺激する。

我々は議会を世論のための観客席として使うつもりである。〔…〕議会は、我々の利害と目的の効果的な達成にとって手始めでしかない。〔…〕今後も活動の重点は、党大衆の底辺そして議会外での活動に置かれ続ける<sup>63</sup>。

ラディカル・エコロジストグループによる主張そのものであるこうした見解は、ヘッセン GLU 内に多数存在する価値保守主義者の

60 Veen: Die Grünen zu Beginn der neunziger Jahre, S. 13; Hüllen: Ideologie und Machtkampf bei den Grünen, Bonn 1990, S. 151.

61 Bieber, Horst: „Prost auf das Ende der Einheit“, in: Die Zeit 31/1978 (28.7.1978)。別の資料によれば120名がGLW、40名がGLUからの参加者であった。Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 151; Felder: Bündnis 90/Die Grünen in Hessen, S. 52.

62 ダニエル・コーン=ベンディット (1945-) は、ナチスによる迫害でフランスに逃れたユダヤ系ドイツ人の家庭に生まれた。幼少期をフランスのノルマンディーおよびパリで過ごす、13歳の時に父親が弁護士事務所を開いていたフランクフルトに移ってくる。16歳を迎えた1961年に国籍選択を迫られドイツ国籍を選択する。1965年秋からパリ第10大学にて社会学を学んでいたが、1967/68年に起こったパリの学生運動において中心的な役割を果たす。その結果フランス政府により国外退去処分となり、フランクフルトに戻り J. フィッシャーらと共にシュボンティを拠点に活動を始める。その後も環境保護・多色陣営と関わり続けていたが、連邦政党緑の党の結党時点では入党しなかった。1982年に緑の党に入党し、1989年にはフランクフルト副市長に就任する。1994年以降はヨーロッパ議会議員を務めているが、1999年以降はフランス緑の党選出の議員としてヨーロッパ議会議員の地位にある。Cohn-Bendit, Daniel: Wir haben sie so geliebt, die Revolution, Frankfurt a. M 1987.

代議制についての理解とは到底相容れないものであった<sup>64</sup>。ヘッセン GLU は、彼および教条主義的新左翼の候補者をリストから除外するよう要求し、それが受け入れられないならば、GLH から脱退する旨の最後通告を 8 月 1 日の回答期限をつけて行った<sup>65</sup>。これに対して GLW は期限内の回答を行わなかった。ヘッセン GLU は GLH からの脱退を通告し、GAZ との提携を再び模索し始める。しかしながら GAZ はすでに独自に選挙戦を戦う方針を決定しており、AUD との共闘を決定する一方で、新聞広告等で自らの候補者を募集している状況であった<sup>66</sup>。

結局コーン=ベンディットはその後立候補をとりやめ、一見対立の原因は取り除かれたようにも見たものの、ヘッセン GLU の迷走は自党員の目にも明らかであった。党執行部としては緑の運動の分断を防ぐために、候補者の擁立を断念するが、これに失望したヘッセン GLU の党員は GLH と GAZ へと流出していく<sup>67</sup>。

10 月 8 日に行われたヘッセン州議会選挙では、GLH が 1.1%、GAZ が 0.9% の得票を得るにとどまり、5% 条項の存在により両党とも議席獲得はならなかった。また選挙資金の交付もヘッセン州においては 1.5% の得票率の獲得が必要であり、両党ともこれを獲得する

こともできなかった<sup>68</sup>。

## 5. ニーダーザクセン GLU リーベナウ党大会

再び視点をニーダーザクセンに向ける。ヘッセン GLU のポールハイム党大会と同様の展開が今度はニーダーザクセン GLU の党大会でも繰返されることになる。1978 年 7 月 22 日にノーベル・ダイナマイト社の工場があった町リーベナウ (Liebenau) で党大会が開催された。108 名の代議員の参加の下で開催されたこの大会は、議案の討議を始めるまでに 160 分を要し、その後の議事は文字通り爆発することになる<sup>69</sup>。開始早々に左派勢力による議事変更動議が採択され、多色リスト・ハンブルクの代表による演説が認められることになった。登壇したのは後に緑の党内で原理派の中心的人物として名を馳せることになるレーンツ (Reents, Jürgen) であった。レーンツは当時共産主義同盟に所属しており、ベダーマンがその事実を指摘して議事運営のあり方を批判する。しかしながらベダーマンに対する批判の方がはるかに強く、この党大会の雰囲気は雄弁に物語っていた<sup>70</sup>。

その後の議事進行において、前述のベダー

63 „Keine Zusammenarbeit zwischen ‚Grüner Liste‘ und ‚Grüner Aktion‘“, in: FAZ vom 25.07.1978, S. 2; Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 151; Bieber, Horst: „Prost auf das Ende der Einheit“, in: Die Zeit 31/1978 (28.7.1978); Süddeutsche Zeitung vom 24.7.1978.

64 その後緑の党内におけるコーン=ベンディットの立場はあきらかにレアロであった。

65 „Politischer Faschingsverein“, in: FAZ vom 27.7.1978, S. 4; Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 151; „Vogelschützer und Spaßvögel“, in: Spiegel Nr. 31/1978, S. 29f.; Arbeiterkampf vom 7.8.1978.

66 „Die Grünen - zwischen Bürgerinitiative und Partei“, in: FAZ vom 11.8.1978, S. 5. 組織の構築がより進展していたバイエルンにおいて GAZ と AUD の共闘はより積極的に進められていた。これについては稿を改めて論じる予定である。

67 „Grüne Liste Hessen‘ droht auseinanderzubrechen“, in: FAZ vom 28.7.1978, S. 3; „Grüne Liste Hessen will Bruch vermeiden“, in: FAZ vom 3.8.1978, S. 2; „Cohn-Bedit zieht Kandidatur zurück“, in: FAZ vom 17.8.1978, S. 4.

68 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, A83.



マンのヘッセンとハンブルクでの活動がやり玉に挙げられた。その先頭に立ったのはオットであった。彼はベダーマンが「共産主義という実在しない脅威をあおり立てる」<sup>71</sup> ことによって、GLU と左派オルタナティブ勢力との共闘が困難になっていると批判する。

続いて執行部の選出がなされ、前述のような反ベダーマン派による多数派工作の結果、ベダーマンはわずか 13 票しか獲得できず再選されなかった。党首にはやはり価値保守主義者と見なされていたアイクホフを破って、当時 49 歳であったオットが選出された。また副党首にはモムバウアー、第二副党首にシル<sup>72</sup>、会計にはトーマス、書記にはハイエ (Haye, Erich) が選ばれた。またシェットラー、レップラー (Löffler, Cornelia)、ヴォルフ (Wolff, Sigrid)、マルクアルド (Marquardt, Jürgen) が新執行部の役員として名を連ねた<sup>73</sup>。この人選を見た時、基本的には価値保守主義的な理

念を標榜しつつも、左派オルタナティブ勢力を党の支持基盤として取り込むことに肯定的な立場をとる人物が多数を占めていた。

こうして反ベダーマン派は彼の排除に成功するものの、ポスト・ベダーマン体制の着地点の設定には困難が予想された。というのも価値保守主義的な市民・エコロジー路線の信奉者は依然党内の多数派であり、また左派オルタナティブ勢力の取り込みのあり方については激しい意見の相違が存在していたからであった。

ここで大きな役割を果たすことになったのが、再び「第三の道」であった。前述の 7 月 9 日のリンドヴェーデルでの執行部会決議が党の基本方針としてリーベナウ党大会でも採用された。そもそも「第三の道」論を GLU 内に持ち込んだのはオットであり、その経緯からポスト・ベダーマン体制においてオットが主導権を握ったのは自然の流れであった。

69 この党大会に対するメディア報道については以下の記事を参照。„Turbulenter Landesparteitag der Grünen in Liebesau“, in: Hannoversche Allgemeine Zeitung (以下 HAZ と略す) vom 24.7.1978; „GLU-Parteitag: Tumulte - Beddermann abgelöst“, in: Bild Hannover vom 24.7.1978; „Beddermann nicht mehr Vorsitzender der GL“, in: FAZ vom 24.7.1978; „Noch grün oder schon ein bißchen bunt?“, in: FAZ vom 24.7.1978; „Rot und ratlos: Die Spaltung der Grünen“, in: Hamburger Abendblatt vom 24.7.1978; „In Niedersachsen droht eine Spaltung in Linke und Rechte“, in: Die Welt vom 24.7.1978; Bieber, Horst: „Prost auf das Ende der Einheit“, in: Die Zeit 31/1978 (28.7.1978).

70 „Ungefähr alles, was krecht und fleucht“, in: Der Spiegel 31/1978, S. 26f.; „Noch grün oder schon ein bißchen bunt“, in: FAZ vom 24.7.1978.

71 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 137 und 145.

72 当時 69 歳であった彼はターデン (von Thadden, Adolf) が率いる極右政党であるドイツ帝国党 (Deutsche Reichspartei) に一時期属していた。

73 Otto, Georg: „Es begann vor 30 Jahren. AKW-Gegner in den Landtag - Grüne Liste Umweltschutz“, in: Alternativen. Zeitschrift für eine ökologische, solidarische, basisdemokratische, gewaltfreie Gesellschaft, H. 62 (Herbst 2007), S.7-8, hier S. 7; Bieber, Horst: „Prost auf das Ende der Einheit“, in: Die Zeit 31/1978 (28.7.1978); „Die Grünen - zwischen Bürgerinitiative und Partei“, in: FAZ vom 11.8.1978, S. 6; Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S 148. 本稿でも再三強調しているように、左派オルタナティブ勢力は極めて多様な集団であった。その定義にはそれゆえに注意が必要であるが、FAZ 紙はこの大会において代議員の約 2/3 が「左派」であったと述べている。またこの大会において執行部の 1/3 を毎年改選するという制度が議論されていたが、決定には至らず検討委員会を設置することになった。これは緑の党において「ローテーション制度」として実現することになる。

しかしながら先の執行部会での議論と同様に、オットによる「第三の道」論はその意味内容について十分な議論を経て採択された訳ではなく、むしろ左派か右派かという本質的な議論の過度な先鋭化を回避する手段として受け入れられたのであった。

そのことは党大会直後の8月1日にシャウムブルク (Schaumburg) 郡支部が発した以下のような公開書簡が雄弁に物語っていた。

我々は、リーベナウで性急に採択された決議を、党の「今後の方向性を指し示す」ものと見なすのは無責任であると考えます。「第三の道」について、十分に情報が提供されたわけでも、それについて議論が重ねられたわけでもない。我々は他の郡支部の状況について問いたい。諸君は、党の仲間と「第三の道」論について一回でも議論をしたことがあるのか、そして「第三の道」について何らかのイメージを持っているのか<sup>74</sup>。

### 5-1. ベダーマンのその後

一方ベダーマンは党代表を辞任後、GAZに接近していく。彼は既存の政党という形態に対して肯定的立場をとっており、また彼にとって重要なのは「エコロジー」という理念の実現であり、その意味で彼の考えはGAZの路線に近かった。また彼自身は党組織の運営方法そのものに対する関心は低く、それは彼

がそれまで政党というものに関わった経験がなかったことが一つの要因かもしれない。それまで他党において党活動に関与したことがある黨員は、「党内民主主義」といった組織運営の原則に対して敏感であり、ベダーマンに対する批判のある程度はこの部分に向けられたものであった。その後ベダーマンは一黨員としてニーダーザクセン GLUにとどまるが、オットはそれを容認するつもりはなかったようである。彼はベダーマンがGAZの幹部会に参加していた事実を咎め離党を勧告する<sup>75</sup>。これに対してベダーマンは「現在党内で起こっている事態の展開、それはエコロジー的思考が〔ドイツ社会において：筆者〕十分な影響力を持ちえるのかどうか試す機会が失われていく展開なのであるが、それは極めて残念である」<sup>76</sup>と左派オルタナティブ勢力およびそれに譲歩する人々を非難する。そして以下のような警告を発しながら、オットの勧告に従って9月12日に離党した<sup>77</sup>。これ以降ベダーマンは緑の運動の表舞台から姿を消すことになる<sup>78</sup>。

GLUの活動において問題なのは、黨員の多くがエコロジーを主として急進民主主義的な実験と理解している点にある。「新たな民主主義理解」「政党に対する新たな解釈」「底辺民主主義」といった標語で、これまで確立してきた協会や政党といった組織形態が脇に押しやられてし

74 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 147.

75 „Die GLU will sich gesundschrumpfen“, in: FAZ vom 30.8.1978, S.4.

76 „Ungefähr alles, was kreucht und fleucht“. in: Der Spiegel, 31/1978, S. 26-27.

77 „Kleine Meldungen“, in: FAZ vom 16.9.1978, S. 4。ベダーマンの離党については以下も参照。Braunschweiger Zeitung vom 16.9.1978; Neue Hannoversche Presse vom 16./17.9.1978; Deitster- und Weser-Zeitung vom 15.9.1978; HAZ vom 16./17.9.1978; SZ vom 16./17.9.1978; Bild vom 16.9.1978.

78 彼はAUDとGLUの合同には反対の立場で、むしろGAZとの「協力」に賛成の立場であった。しかしながらベダーマンはその後もGAZに入党することはなかった。Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 299.

まった。その帰結というものは多くの場合、原則に関する非生産的で人々を消耗させる議論に行き着く。それによって穏健派の党員の感情は傷つけられ、少数派に道を譲ることになる<sup>79</sup>。

この警告は、まさに緑の党のその後の展開を予告するものであった。

### おわりに リーベナウ党大会後のニーダーザクセン GLU

1978 年前半におけるニーダーザクセンおよびヘッセンの緑の運動から何を読み取ることができるであろうか。

ニーダーザクセン GLU そしてヘッセン GLU は価値保守主義を信奉する、主として市民層によって設立された政党であった。とりわけニーダーザクセン GLU にはそのことがあてはまった。

他方で1978年初頭以降、左派オルタナティブ勢力の流入が各方面から報告されていたが<sup>80</sup>、6月に行われたニーダーザクセン州議会選挙前後を契機に、左派オルタナティブ勢力の存在はもはや無視できないものになっていた。左派オルタナティブ勢力といっても実際には平和運動、女性解放運動、非教条主義的新左翼から「潜入戦術」を進める教条主義的新左翼まで極めて多様であった。しかしながら隣接するハンブルク州やシュレスヴィヒ・

ホルシュタイン州と比較すると、あえて一般化するならばニーダーザクセンでは市民・エコロジー勢力の優位は維持され続けたと言えたが、勢力配置はニーダーザクセン州内に限っても地域毎に極めて異なっていた。例えばシュターデなどのハンブルク州と隣接する地域やゲッティンゲンなどの大学都市の支部内においては左派オルタナティブ勢力が強い傾向が見られた。

ただしここで注意を払っておくべきは、こうした党内の勢力配置の変化は、左派オルタナティブ勢力の流入それ自体よりも、むしろ彼らとの共闘を望む既存の党内勢力によって引き起こされた側面が強かったことである<sup>81</sup>。ヘッセン GLU のポールハイム党大会、そしてニーダーザクセン GLU のリーベナウ党大会で起こったベダーマンやファウストの解任は、こうした党内の勢力配置の変化の結果と言えた。しかしながらこうした「中間派」と呼ぶことができる勢力は運動の分裂を考えてはおらず、彼らの目標はあくまでも左派オルタナティブ勢力を党の支持基盤として取り込むことであった。そうした努力がなされ続ける様々な思惑の中で大きな位置を占めていたのは、5%条項という選挙制度と政党への選挙費用交付金の存在であった<sup>82</sup>。

またベダーマンの失脚と左への党の拡大の傾向は、単純に価値保守主義勢力の党内での影響力の喪失を意味した訳ではなかった。そもそもニーダーザクセン GLU は大多数の党員を価値保守主義的ミリューから供給してお

79 „Rundbrief von Carl Beddermann am 12.9.1978“, in: Hallensleben, A72.

80 „Die Grünen - zwischen Bürgerinitiative und Partei“, in: FAZ vom 11.8.1978, S. 5.

81 シュプリングマンは思想的には一貫した価値保守主義者であったが、その彼でさえ急進左翼的な若者との交流を通して、その思想に対して一定程度の理解を示すようになっていた。こうした左派と価値保守主義者の間の相互理解のプロセスの一例については以下を参照。中田潤「新しい社会運動における価値保守主義」54-55頁。

82 主としてこの要因により、小規模政党は選挙という目標が設定されることによって党内・派閥間の求心力が発揮され、それが一段楽すると内紛を繰り返すというサイクルを繰り返していくように見える。

り、彼らは自らが依拠するイデオロギーを党内においてあえて自覚することはほとんどなかった。左派との接触のなかで彼らは次第に自らのイデオロギー的な立場を自覚するに至る。またその際に価値保守主義的視点を理論的に体系化したグルールとその著作が果たした役割も小さくなかった<sup>83</sup>。こうして左派に刺激される形で価値保守主義勢力も自己主張を強めていく。オットが党首に選出された後も、党内対立は終息した訳ではなかった。

### 党員の増減：党基盤の変化

一方リーベナウの党大会で示された GLU の重心の移動を党の「変質」と解釈し、活動に対して距離をとる者も現れてきていた。これは結党以来常に増加し続けていた党員数が、この党大会を境に一部の支部で減少に転じるという形で顕在化していた。例えばリュージュウ＝ダンネンベルグ郡支部では 10 名、オスターホルツ＝シャルムベック支部では 10 名、ハノーヴァー都市部支部では約 20 名、アインベック＝ノルトハイム支部では 17 名の離党者がいたことが記録されている。また 11 月に開かれたオルデンプルク (Oldenburg) での党大会への報告によれば、アッマーランド郡支部では党員数は半減 (-8)、リュージュウ＝ダンネンベルグ郡支部では 46 名減、パイネ郡支部は 13 名減、ハノーヴァー都市部支部は全党員の約 25% にあたる 29 名減、ヴィルヘルムスハーフェンでは 7 名減、ウルツェンでは全体の 1/8 (実数は 8 名) の党員が離党していた<sup>84</sup>。

こうした「離党の波」への対応策を議論す

るためにオルデンプルク党大会に先立つ 10 月 8 日に GLU 執行部および郡支部の代表による会合が開かれていた。しかしほぼ半数の郡支部はこの会合に代表を送っておらず、党の方向転換に対する不信感の強さが読みとれた<sup>85</sup>。当時の関係者の回想によれば、そもそも反原発運動を中心に市民運動組織の活動が活発であったニーダーザクセンにおいて、政党化を目指して緑の運動に身を投じた市民運動の活動家は全体としては少数派であった。この時期に左派オルタナティブ勢力の流入によって、市民運動の政党化について価値保守主義者たちが構想していた運動のイメージから乖離し始めた時、彼らはその現実の展開に幻滅し、再び市民運動の中に戻っていったのであった<sup>86</sup>。

ともかく離党の波の原因として参加者が指摘した要因は 2 つに集約された。その第一は、党の左派への重点のシフトであった。上記のような離党傾向が顕著な地域は総じて農村部であり、保守的な政治風土をもっていたことはこうした主張を間接的に裏付けていた<sup>87</sup>。また先の州議会選挙においてリュージュウ＝ダンネンベルグ郡に次いで GLU が高得票率を獲得していたウルツェン郡支部を率いていたシェットラーは、K グループを排除しないのならば、支部自体を解散する意図を公言していた。こうした姿勢の背後には、左派の影響力の増大が離党者の増加の要因となっているという理解があった<sup>88</sup>。

さらにこうした党員の減少傾向は、全ての党支部にあてはまるものではなかったことが逆説的であるが党内での左派の影響力の増大

83 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 150.

84 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 156.

85 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 156.

86 Harms, Rebecca へのインタビューより (2018 年 8 月 22 日実施)。

87 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 156.

88 „Uelzens ‚Grüne‘ stellen politisches Ultimatum“, in: Allgemeine Zeitung der Lüneburger Heide vom 25.10.1978.

を示していた。例えばゲッティンゲン、シュターデ、ハールブルク、フェルデンなどの支部において、この時期黨員数はむしろ増加していた<sup>89</sup>。これらの支部の地理的な状況に着目するとき、一定の共通性を指摘することができる。それはいずれも大都市であるか、大都市の近郊に位置することによって大都市の影響を受けやすい地域であった。ゲッティンゲンはニーダーザクセン州南部の中核都市であり、シュターデやハールブルクはハンブルクの衛星都市と言える存在であった。またフェルデンも大都市ブレーメンに隣接し、経済的にはその一部をなしていた。新たな入党

者の政治的傾向を史料的に明らかにすることはできないが、前述のような地理的状况から、これらの支部には大都市において比較的強い影響力を持っていた左派オルタナティブが流入してきていたことは容易に推測できる。実際にシュターデとゲッティンゲン支部は左派に対して党を開放することを明確に謳っており、さらに党則が禁止していたにもかかわらずKBのメンバーを受け入れてさえいた<sup>90</sup>。一部の支部でのこうした黨員の増加現象は、その意味で党の方向転換を裏付けていた。

(なかた・じゅん 本学部教授)

---

89 具体的な黨員数は以下の通り。ゲッティンゲン (+6:計 67)、シュターデ (+5:計 16)、ハールブルク (+16:計 22)、フェルデン (+10:計 20)。Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 156.

90 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 157.

